

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K17869

研究課題名(和文)「体育」概念の再定義：「体育学概論」と「生き方としての哲学」からの挑戦

研究課題名(英文)Redefinition of the notion of Taiiku: From the perspective of "Review of Taiiku-Gaku" and Philosophy as a Way of Life

研究代表者

林 洋輔 (Hayashi, Yosuke)

大阪教育大学・教育学部・講師

研究者番号：6064555

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：以下では本研究最終成果論文の抄録を提示する。

本総説論文は『体育学研究』総説論文の総合的な分析結果に基づき、「体育 Taiiku」概念の本質ならびに捉え方を明示する。本論文は次の5つの部分から成る。(1)序論、(2)方法に関する言説、(3)人文科学象限の観点に拠る『体育学研究』総説総覧、(4)社会科学象限の見地に拠る分析、(5)医科学象限の視点よりの吟味、そして結論的な注釈が続く。結論として体育とは個人におけるとりわけ身体面・社会面から幸福を実現しようと試みる身体活動を指す。より啓発的な議論が Taiiku そして幸福の本質と外延をめぐって継起する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで「体育とは何か」との問題提起が行われる場合、その提起者のほほすべてにおいて、体育を「Physical Education (PE)」と認識のうえで議論が行われてきた。しかし、現行の「体育学」ではこのPEと直接の関係を持たない研究発表が多く行われるなど、「体育学」における「体育」はPEとは別途に検討される必要が往時から指摘されてきた。本研究ではこの指摘を受け、「体育の再定義」についてはPEではない「体育学における『体育』の概念」を再定義することとし、研究を完遂した。体育学における体育とは「人間の幸福における物質的ならびに社会的基盤づくりに貢献する身体運動の総称」と再定義されたのである。

研究成果の概要(英文)：Below is the summary of the final thesis of this project, which contains the nucleus of the research:

This review attempts to clarify the essence and perspective of "Taiiku" based on the results of the general analyses of general reviews of the Japan Journal of Physical Education, Health and Sport Sciences. The review comprises of the following five parts: (1) an introduction, (2) a discourse on methodology, (3) general reviews of the journal from the humanities perspective, (4) analysis from the social sciences standpoint, and (5) examination from the medical-natural sciences point of view, followed by concluding remarks. In conclusion, Taiiku designates bodily activities that try to realize well-being in individuals particularly from bodily and social viewpoint. A more enlightened discussion can now ensue on the essence and expansion of Taiiku and "well-being."

研究分野：体育・スポーツ哲学

キーワード：体育 生き方としての哲学 幸福 体育学概論 人文科学象限 社会科学象限 医科学象限 体育学

1. 研究開始当初の背景

【現行の「体育学」において「体育」概念をめぐる不一致が続く現状】

科研費採択時の「研究計画書」から、研究完遂後に大幅加筆

体育学において、いま「体育」の概念を再定義する時宜であると考えられる。というのも、会員総数六千人強を数える現在の日本体育学会において、例えば佐藤臣彦(1993)あるいは久保正秋(2010)による諸研究が示したような、体育の原義は「教育」であるとする見解に馴染まない研究発表ならびに専門領域が多数存立し、体育学および体育学会を支えている現状が見られるからである。その一例を挙げるのならば、現行の日本体育学会における有力な専門分科会である「介護福祉・健康づくり領域」、「スポーツ人類学領域」、および「アダプテッド・スポーツ科学領域」などがその端的な証左である。これらの領域は学校の体育授業である「体育 Physical Education」とは直接に関係しない研究活動および研究成果を挙げつつ、体育学および体育学会に不可欠の貢献を果たしている。小括的に言えば、もはや体育学における現状の「体育」は、Physical Educationとして一義的に定められない状況とって間違いない。

ところで、これまで「体育」の概念の実質明らかにするために、「体育学とは何か」と問う議論がしばしば見られる。この議論は体育学に属する研究者が「体育とは何か」を考えるために採用してきた伝統的なアプローチであって、主に体育原理分野(現在の体育哲学分野)の研究者を中心として行われてきたことが確認されている。

しかしながら、斯界の有力研究者たちによる長年の検討にもかかわらず、「体育・スポーツ」という表記がいまなお一般社会の諸所に残存するように、体育原理(哲学)の牽引役であった佐藤臣彦(1991)が両者の区別をはっきりと解明したにもかかわらず、「体育」の概念と「スポーツ」の概念の混同はいまなお続いている。また体育学人文社会系の有力研究者である来田享子(2010)が『日本体育学会60周年記念誌』における座談会で提案したように、教育としての体育はもとよりスポーツそして人間の身体運動全般を扱う「日本体育学会」を「スポーツ学会」として統一表記することが望ましいとの見解も見られるなど、「体育」概念は現在も「スポーツ」あるいは「身体運動」とのあいだで概念画定の境界が定まらない。すなわち、「体育とは何か」という問いは今もって体育学の専門研究者でも回答することのできない現状が明らかである。

ところで、上で述べられたような「体育」の概念の混迷を深める現状、そしてそれに近似する概念との区別曖昧な状況が学術的にも社会的にも問題を誘発することは上で挙げた佐藤臣彦(1993、1999)が総説的に論じることで指摘するばかりではない。すなわち、佐藤・岡野(2015)が教育学の観点から「体育」の実質を見きわめる議論を行うなど、体育学の内外から「体育」概念の問い直しが行われている。これらの研究の学術的背景を俯瞰するに、体育学が「体育」に対する統一的な再定義を果たすことは、佐藤臣彦(2000)が唱える「学問力」の観点からも体育学はじめ関連研究者にとって必須かつ急務の事項と言える。

2. 研究の目的

本研究は以上の研究背景を受け、「体育」概念を再定義し、その理論的定礎を果たすことにあたる。言い方を変えるならば、現行の体育学においても「体育」概念について共通理解が見られない現状を踏まえ、「『体育』とは何か」と改めて問い、答える。

3. 研究の方法

わが国未踏の領域である「生き方としての哲学」の視点、および現行の「体育学」の研究領域を包括的に捉える「体育-学-概論」の視点に立脚し、体育の再定義が期された。

4. 研究成果

研究成果は2017年度から2019年度をもって予定通りに完遂された。2020年7月現在、上記の最終成果論文は『体育学研究』への修正再投稿によって査読者兩名から「A 掲載可」の判定を受け、数点の修正要求によって「修正再審査」の段階にある。そして上記判定による今後の作業進捗により、投稿先の雑誌である『体育学研究』への掲載が見込まれる段階と断言できる。そしてその最終成果論文では、体育学における体育を“Taiiku”として捉えなおす着眼による議論が総説論文を舞台として果たされたのである。すなわち、これまでの事例においてはほぼ無条件的に教育を意味する「体育 Physical Education (PE)」であった現状にいわば「待った」をかけ、体育の問い方を再考することで「体育の再定義」に向けた光を与えることに成功したと言える。具体的に言うと、身体運動の全般、学校教育とは無関係の競技スポーツ、さらには認知症予防の運動プログラム開発までを引き受ける体育学とは、「Taiiku」を研究する学問である。すなわち、体育学における「体育」とは「Physical Education」ではなく、「Taiiku」である。そしてこの「Taiiku」を問うことに「体育の再定義」として研究の意義が見いだされたのである。

最終成果論文では、以下の研究成果が明示された。当該成果論文の結論部から、そのままの形で引用することとしたい。

Taiiku の研究は人間の身体運動に着眼し、幸福の達成を目指す。とりわけ日本学術会議健康・スポーツ科学分科会による一連の提言(2008, 2011, 2017)でも明記されたように、スポーツをはじめ適切な身体運動の経験は児童期そして成人期における人間の骨格、筋機能、呼吸循環機能や脳・神経機能の発達ならびに生活習慣病の改善に資するばかりか、子どもの心理特性や総合的な活力づくりにも貢献する。すなわち、Taiiku とは人間の幸福における物質的ならびに社会的基盤づくりに貢献する身体運動の総称と結論できる。別の視点から言えば人間の身体運動へ向けた問いに対する典拠ある論証と結論、すなわち学問の手続きに拠り物質的・社会的側面より人間の幸福を採求するのがTaiiku の研究であり、Taiiku の学として身体運動を通じた幸福に資する知恵を集成する学問が体育学である。

以上から、「体育の再定義」とは「Physical Education」としての体育を問い直すことではなく、体育学における「体育」、つまり「Taiiku」を問うものであるとの着眼が示されることによって研究が進捗・完遂した。

以後においては上記の研究成果を引き受けるものとして、「Well-Being」に対して体育学がどのように貢献しているのか、といった観点から研究が引き続き行なわれる。具体的に踏み込んで言えば、身体運動への着眼に基づいて物質面・社会面より人間の幸福を追求する体育学において、その「幸福」とは何であるのか。さらなる研究が最終成果論文の著者によって検討されてゆくのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 林洋輔	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 福祉を創る者 「体育学者」の実質をめぐる論考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間福祉学研究	6. 最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayashi Yosuke	4. 巻 67
2. 論文標題 Dialogue, Conversation, and Disputation as "Play of Logos": Based on Johan Huizinga's Homo Ludens	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Memoirs of Osaka Kyoiku University, Humanities and Social Science, Natural Science	6. 最初と最後の頁 299-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hayashi Yosuke	4. 巻 68
2. 論文標題 Spiritual Exercise toward a Mode of Educational Practice: For Reconsidering "Philosophy as a Way of Life"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Memoirs of Osaka Kyoiku University	6. 最初と最後の頁 71-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 林洋輔
2. 発表標題 「ロゴスの戯れ」としての哲学： 遊戯論からの視点
3. 学会等名 第3回サイファイ・フォーラムFPSS（科学者のための科学の哲学フォーラム）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林洋輔
2. 発表標題 1. 生き方の確かさを証明する場所 (トポス) 学問 (哲学) 論争の意義をめぐる序説
3. 学会等名 身体運動文化学会第23回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林 洋輔
2. 発表標題 「文理融合」の実質と哲学の位置 「体育学」の事例から考える
3. 学会等名 第2回サイファイ・フォーラム (FPSS: 科学者のための科学の哲学フォーラム)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林 洋輔
2. 発表標題 「体育学概論」は成し得るか? 「哲学のすすめ」と「医学概論」の視点から
3. 学会等名 身体運動文化学会第22回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hayashi Yosuke
2. 発表標題 Philosophy as a Way of Life in the East and the West
3. 学会等名 第5回日中哲学フォーラム (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林 洋輔
2. 発表標題 ピエール・アドPierre Hadot における自然哲学の綱要
3. 学会等名 日本哲学会第76回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 林洋輔
2. 発表標題 「概念からの体育・スポーツ哲学」に向けて：序的考察
3. 学会等名 身体運動文化学会第24回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林洋輔
2. 発表標題 体育学問答：徳育・体育・スポーツに際して．第70回日本倫理学会
3. 学会等名 第70回日本倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林洋輔
2. 発表標題 読書のエグゼルシス：ピエール・アドの議論の先へ
3. 学会等名 第6回日中哲学フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayashi Yosuke
2. 発表標題 Eco-Ethics as a Form of Spiritual Exercise.
3. 学会等名 The 24th World Congress of Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----